

江戸時代後期における中華文化受容の様相

— 画人増山雪斎二題 —

山口 泰弘

○はじめに

雪斎を号とする伊勢長島藩主増山正賢（一七五四～一八一九）は、生前、文芸に秀でた風雅の人として尊敬を集めていた。

田能村竹田は『山中人饒舌』（上巻 天保五年）で、雪斎に対して「画の本質である氣韻生動は、かつては士大夫や逸人の描いたもののなかに現われたものである。近年になって士大夫の中にこの本質を尽くすものがあることを聞いていない。そのなかにあって雪斎の書画は、通り一遍の骨法用筆を脱して絶妙の域に達している。すなわちこの人こそ人格と地位とを兼ね備えた士大夫であって、その画は氣韻生動の筆墨である。」⁽¹⁾と賞賛を贈っている。文人の出自を士大夫及び逸人と捉えた竹田の認識では、逸人（俗世間をのがれて生活する人）は我が国にも輩出したが、士大夫（人格がすぐれ高い官職についている人）のなかに画の本質を汲み尽くす人は久しく現われることはなかった。大名である雪斎を士大夫になぞらえた竹田には、雪斎が文人としての士大夫像を我が国において具現した希有な存在と映ったのである。

文人として多種の領域に関心を示した雪斎であるが、とりわけ意を注いだのは画であった。その中心を沈南蘋風の濃彩による写実的な花鳥の密画が占める、と従来認識されてきた。しかし近年の研究成果は、ほかにも文人画風の墨筆・淡彩による写意的花鳥画や水墨の山水画における佳品の存

在を明らかにしており、雪斎にこびりついた南蘋派花鳥画家としてのイメージの修正が求められている。⁽²⁾

しかしながら、画域の如何にかかわらず、雪斎において、知的関心に留まらず日常生活までも貫いているのが文人文化であり、その淵源である中華文化に対する敬仰の念である。本稿では、その知的関心と日常生活の双方において、中華文化受容を示す顕著な例をふたつの史料を通して具体的に描いていき、その傾倒ぶりとして、江戸時代後期における中華文化受容の様相を明らかにしていく。

○『弘采録』

山形県酒田市立図書館光丘文庫には、庄内藩士池田玄斎（一七五五～一八五二）の著書や関連資料が収蔵されている。『弘采録』（一三九巻 一八一四）は、その主著で、生涯の長きにわたって書き溜められた随筆集である。その三五巻に「一、増山河内守侯風流の事」と題した一文が収められている。これは、庄内藩の支藩松山藩の藩士相良助右衛門からの聞き書きを書き留めたものである。⁽³⁾

増山河内守諱君賢雪斎と号す近来諸侯方にての好事家也御学問もあり書画は名高き御妙手也

相撲番付に見立てて当時出版された「文人番付」では、大関（当時は横綱ではなく大関が最高位）を超える別格、行司に充てられたほどである。

後段で触れるが、囲碁・書・煎茶に関する著作があり、文人文化延いては中華文化に対する造詣の深さを示している。また、儒学に関する著述もあり、儒教的教養人としての学識も窺わせる。『弘采録』がいう「御学問もあり」は、これを指すのであろう。深い教養と洗練された感性で中華文化に親しむ文人雪斎に、「風流拔群の人」、「風流自在」などと、当時の人々は讃辞を贈っている。雪斎の文人としての声望は、好事家、高い学識、書画の達人として、遠く庄内にも届いていた。

『弘采録』は、「名高き御妙手」と特筆する書画について、次のように続ける。

山水の画は此候と其臣南湖にと、めたり文晁等か及所にあらず玄斎常に慕ふ処にして近来の名家と称すへし其余はみな匠気ありて好に詔ふ肺腑より出たる画にて文人の賞すへきにあらず米菴か書文晁か画一双の時世装（時世装）とはいはん増山侯の御画兼葭堂の画などは超凡の高品にて俗眼の及処にあらず高人韻士の賞する所そかし

今日、雪斎画として専ら評価されるのは華麗な色彩で表現された花鳥画であるが、山水画を特筆しているところが、花鳥画家と認識されている現在と異なる。玄斎のみるところ、山水画に関しては、「侯」すなわち雪斎とその臣の「南湖」すなわち春木南湖に止めを刺す。それは、当時江戸で世評の高かった文晁でさえ及ばない、という高い評価となっている。その理由として玄斎が挙げているのは、文晁が「匠気」すなわち世評を気にして技術技巧に趣向を凝らすばかりであるのに対して、雪斎や南湖あるいは両者の知友であった大坂の木村兼葭堂の画は、凡俗を超越した品格の高い

もので、文人が賞すべきものとして近来の名家と賞すべき、という点である。いささか過剰ともいえるが、これは、冒頭に挙げた竹田評と軌を一にするものである。

さて、相良助右衛門は、寛政六年（一七九四）初めて江戸に出席したが、とある日、増山藩邸を訪れた。通された座敷の有様を、助右衛門は次のように玄斎に語った。

初而参候節御書斎へ扣候様御取次先達にて入見候へは不残唐風の御坐敷にて亀甲の石を敷あたりはシツクヒに而殊之外奇麗也長押には唐画山水花鳥の額或は硝子の壺画等色々珍画を掛置たり

西欧をモデルとして近代化が進められるようになる明治時代前、特に江戸時代後期には、中華文化を精神生活の理想と捉えられる人々が多くいたが、精神生活に飽きたらず日常生活に至るまで中華尽くしという人は多くない。経済的裏付けを必要としたことも一因であろう。しかし、その数少ない具現者のひとりが高橋雪斎であった。もっとも二万石に過ぎない小藩の台所は、ために火の車であつたらしい。

さて、助右衛門が通された書斎（書院か）の座敷は、残らず中華風で、亀甲石（亀甲石）を敷き、壁は漆喰が塗られてことのほか美しい。長押には中国製（あるいは中国風か）の山水画や花鳥画の額、ほかに「硝子の壺画」など珍しい画が掛けてあった。

「硝子の壺画」は、ガラスに描かれた西洋画の意味を意味し、今日、ガラス絵あるいは硝子絵と日本では呼ばれる。透明なガラスに裏側から主に油彩で風景や花鳥・人物を描き、表から透明感を楽しむもので、清代に主として広州で制作され、シノワズリの重要な輸出品のひとつとして主に西欧に送られた（図一）。とりわけイギリスで、貴族の領地の居館いわゆる



図1 硝子絵

マナーハウスで、寝室などプライベートな空間を飾った例として残っていることが多い。中国国内でも少数現存するほか、多くはないものの日本にももたらされ、雪斎の日常を飾っていたことになる。

座敷に招き入れられた助右衛門には、円座が勧められた。

円座を敷せ夫え坐したり増山様は曲祿へ御腰懸させられ色々の御物語有之御吸物御酒も出たり器物は勿論箸の類まで皆華物に而結構至極の事共也極御懇意の御方には女中も不残唐の衣服にて当時清朝の風俗を擬し裾の広き袴を着御酌に出候と也助右衛門は初而の事ゆへ御給仕は御近習にてありし

円座にかしこまる助右衛門に対して、雪斎は曲祿に腰掛けて相對し、さまざまな話題を投げかけた。その間に食事が供されたが、吸物・酒など、器から箸に至るまですべて唐物で徹底された。助右衛門は「結構至極」と慨嘆している。ごく懇意になると清朝風の衣装に身を包んだ女中が給仕に

当たるということを助右衛門は聞いていたが、初対面ゆえ、それは叶わなかった。

増山雪斎は、諱を正賢、宝暦四年（一七五四）十月十四日、伊勢国長島藩主正賢の長子として江戸に生まれ、父の死去により、安永五年（一七七六）二十三歳で遺領二万石を襲封した。雪斎はその号で、致仕してのち巢鴨の下屋敷に隠棲したことから巢丘隠人、石を愛したことから石顛道人などと称した。ほかに君選、括囊小隱、玉園、玉淵、灌園、雪旅、長洲（長州）、愚山、松秀園、蕉亭などの別号がある。四十八歳になった享和元年（一八〇一）七月、家督を長子正寧に譲り、自らは江戸巢鴨の下屋敷に退いて自適の生活に入り、一八一九年（文政二年）一月二十九日、六十六歳で病歿した。

四十八歳で窮屈な藩主としての公務を離れた後、雪斎が送った自娛自適の退隠生活は以前にも増して隠逸風雅へと沈潜していった。小祿の譜代大名の家格としては極官である若年寄まで累進するほどの有能な官僚ぶりを見せた継嗣正寧とは異なり、在任中目立った治績のない藩主の関心は、治政よりも個人的な文事に向けられていたに違いなく、長子が襲封の年齢に達するのを心待ちにしたうえで退隠であったのだろう。

雪斎の文人としても自娛のすさびは、画はいうにおよばず、書・詩文・囲碁・煎茶など、文人が嗜みとすべき諸方面にわたっていた。雪斎自身、文人として高いアイデンティティを確立していたことは、遺された著述からわかる。雪斎の著述としては、『國書総目録』を引くと、『観奕記』（一冊 享和三年）＝『囲碁』、『松秀園書談』（三卷三冊 寛政五年）＝『書』（図2）、『煎茶式』（文化元年刊）＝『煎茶』（図3）という書目が掲げられている。『書・書・煎茶』は、文人に必須とされた嗜みであった。さらに『松秀園書談』の奥付には「雪斎膝侯著追刻書目」という目録が付されており、『礼談』『楽談』『射談』『御談』『通雅』といった著述の出版が予告されている。中

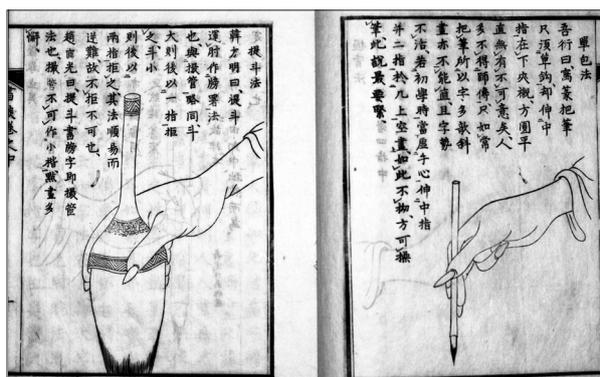


図2 増山雪斎『松秀園書談』

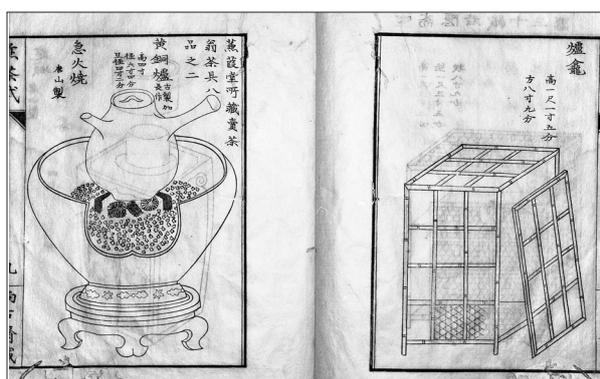


図3 増山雪斎『煎茶式』

国周代、士として学んで備えるべき必修の科目と定められ、儒家が奉持した「周礼」にいう六芸、すなわち、礼、楽、射、御、書、数に関する著述となるはずであり、文人として不可欠の儒教的教養人としての学識も窺わせることは、『弘采録』の「御学問もあり」とする指摘とも通じる。伊勢長島藩の藩校文礼館には、天明五年（二七八五）、孔子を祀る先師廟を建設して祭祀を行っている。藩政にも儒教的価値意識を取り入れようとする雪斎の気概を窺わせる。

「巢丘隠人」は、雪斎が巢鴨に隠居してのちに称した号のひとつであるが、「隠人」は、市隠、すなわち市井に隠居することを志向する雪斎の文人意識を象徴する語である。煩わしい公事を離れた私生活を中華三昧に暮らすために日常までも中華的風流で飾ることは、文人としての全生活を突き詰める究極の目的の意味も持っていたのであろう。『弘采録』が伝える

「増山河内守侯風流の事」は、精神生活のみならず、日常までも中華的風流で飾ろうと徹底する雪斎の志向をつぶさに語っている。

こうした雪斎の中華的文人としての風流は、さまざまな階層にわたる同好の人々と交遊を重ねることによって、より一層拡がり、充実し洗練されたものとなっていった。

幕臣で狂歌師・戯作者として名を残す大田南畝に『細推物理』と名付けられた日記がある。そのなかに、南畝自身はもちろん雪斎も参加した宴の記録がある。雪斎と南畝は、いつの頃かわからないが、交友関係を結んでいたことが知られている。

さて、享和三年（一八〇三年）三月三日のことであるが、この日は朝から晴れており、南畝は、「昼つかた、佐々木氏の翁、孫娘をいざなひ来り小酌」したあと、昼過ぎから、姫路藩主酒井雅楽頭忠道（茶人として知られる宗雅忠以の長子、画人酒井抱一の甥）に招かれて同藩上屋敷で催された宴に出向いた。南畝が目の当たりにした宴の光景は次のようものであった。

昼過るほどより姫路侯酒井雅楽頭殿の宴におもむく。上屋敷の庭に新たに曲水をほり、茶亭四つばかりあり。一亭には長島老侯増山河内守殿御隠居烏山世子大久保佐渡守殿荒井みなと犬塚印南唯助などあり。一亭には主人おはす。一亭には明楽あり。童子数人紅の服をきたり。一亭には渡辺瑛玄対が輩、画をなす。永原痴翁のかける書どもを壁におせり。活文といへる僧、長崎にて華音を学べるとて、庭の石上に躡りて、もろ人の詩を華音にて吟咏す。曲水の辺にも甃しきて碁うつもあり。水の上には、盃に鍾をいれてうかべり。

この日の宴は、いわゆる蘭亭曲水を趣向として催された。三月三日という日選ばれたのは、中国東晋の王羲之が、永和九年（三五三）のこの日

に紹興郊外会稽山の蘭亭に知友を招いて曲水の宴を張った故事に由来する。この日に備えて、酒井家では上屋敷の園庭に新しく曲水を掘り、曲水のほとりに茶亭を四つ設えた。そのひとつに主催者酒井忠道が座を占め、ほか招かれた大名・儒者などが座す亭、漢画家渡辺玄対^⑩や漢書家永原痴翁の構える亭、明楽の奏団が占める亭があった。ほかにも、曲水の辺には多くの参会者が思いつきに宴を楽しんでおり、南畝もそのひとりであった。

渡辺玄対の画、永原痴翁の書、曲水の辺に設けられた碁(棋)の席、それに明楽の月琴を琴に見立てると、^⑪ 碁棋書画という文人の嗜み、いわゆる四芸となる。これも当日の副次的な趣向となり、当日の中華尽くしぶりがかがえる。おまけに、長崎帰りで信州上田在住の禅僧鳳山活文(一七七五〜一八四五)を招いて、長崎で清人から直伝された「華音」で、出来上がったばかりの詩を吟咏させるとい趣向が加わって、中華尽くしはさらに盛り上げられたのであった。

多くの参会者のなかでとりわけ南畝の気を惹いたのが、「長島老侯増山河内守殿」すなわち雪斎であった。この年五十歳に達していたが、「御隠居」と書き添えられているように、すでにその前々年(享和元年・一八〇一年)七月には致仕して自適自娛の余生を始めていた。『細推物理』には、宴の主人酒井忠道の詩に加えて、参会者中ただひとり、雪斎の詠んだ詩のみが書き留められており、南畝としても、雪斎を文雅の人として一目置いていたことをもたっている。^⑫

このように、文人文化をほぼ同義語とする中華趣味を体現する人物として周知される存在、それが雪斎であった。当日、華音で雪斎の詩を吟詠した鳳山活文の事績を記した「龍洞鳳山禅師碑文」(菊池貫撰 長野県上田市・常田毘沙門堂)には、

予夙以文字承知於長島侯雪斎君、君好詩章著書画又愛客、以故都下

人士爭執謁其門、一日在坐觀禅僧形貌俊英、音吐宏暢、為君以清音誦
大學經一章詩之周南唐詩數首、其声琅々乎充耳、恍惚如夢遊異境

と刻まれており、雪斎が詩書画に通じるばかりでなく、「愛客」と記されているように、文人たちの交遊の中心にいたことを奇しくも語っている。活文も、享和文化年間頃、しばしば江戸に出ては巢鴨に雪斎を尋ねて親しく交わっていた。

○夢境応酬

『夢境応酬』(写本、十三丁 西尾市立図書館岩瀬文庫)には、外題に「夢境応酬 幽石亭藏」なる墨書がある。「幽石亭」は、前段で取り上げた『弘采録』が、雪斎の家臣で、ともに谷文晁を凌ぐ評価を与えた春木南湖(一七五九〜一八三九)の号。春木南湖は、名を鯤、字を子魚、烟霞釣叟といい、通称門弥。やはり『弘采録』が雪斎とともに「超凡の高品」とする、大坂の文人で雪斎とも深い関わりをもつ木村兼葭堂(一七三六〜一八〇二)とは昵懇の間柄で、その日記『兼葭堂日記』には門弥の通称で頻繁に登場する。

『夢境応酬』は、長崎遊学中の南湖が清人文人と交わした交遊と唐館訪問の記録がまとめられており、下記を冒頭に始まる。

天明八年暮穉七日早曉発于浪華兼葭堂留別木世蕭先生

「世蕭」は兼葭堂の字。長崎遊学は、天明八年(一七八八)の暮穉すなわち九月の七日早曉、大坂の兼葭堂宅を、別れを惜しみつつ出発して始まった。長崎遊学の行程の一部始終は、南湖の著した道中日記『西遊日簿』に

詳しい⁽¹³⁾。途中、岡山で文人画家浦上玉堂を訪ねたり、同じように長崎をめざしていた江戸の洋風画家司馬江漢と遭遇してしばらく同道するなどしながら、同月二八日夕刻長崎に到着した。長崎には十月二六日まで滞在し、十一月二九日夜、藩庁のある伊勢長島に帰着して、三か月近くになる旅程を終えている。

さて、『夢境応酬』によると「小春上浣」すなわち十月上旬のある日に、南湖は唐館を訪れている。

同年小春上浣在肥前州長崎一日与清河太平次到唐館始謁費晴湖先生清河与清湖応酬畢

弘 唐通事清河太平次を同道して訪ねた相手は、費晴湖という清人であった。
泰 晴湖は、商人・船主であり長崎で文人として声望があった。互いにひと通りの挨拶を終えると、南湖の問いを皮切りに、画問答が始まる。問答は、
山口 主として筆談で行われた。
山

- (南湖) 平生唯耽画未及習文辞、故筆語類属杜撰勿咎短
- (晴湖) 姓名肇陽字得天别号清湖、浙江湖州府居住茗漢人也
- (南湖) 臨画有用意乎
- (晴湖) 焚香澄心而把筆
- (南湖) 筆勢早遲又有取禁郵
- (晴湖) 遲早各自有胸中
- (南湖) 教示用筆奧義
- (晴湖) 円滑者第一之神致也
- (南湖) 筆力亦強弱何処否
- (晴湖) 筆勢弱中強、画中式淡式濃加之

(南湖) 画中称位置者何如
(晴湖) 有一幅之中有彼無是全不備
(南湖) 别有画筆妙製否
(晴湖) 多惡白羊毫
先觀尊画一屋在溪底即是凹也、何復露于樹梢
(南湖) 謹承高示于云多謝
(晴湖) 揮筆一画時山容巴拙則善画樹林補欠処無筆者沈着紙絹中尤難常專事之

- (南湖) 諸名家用筆有合筆皴法否
- (晴湖) 素有之
- (南湖) 貴国山水名家属誰乎
- (晴湖) 江州愈鉄生
南湖云又有奚鉄生者有善画山水筆少強然可謂精工
- (南湖) 貴国山水佳地何処
- (晴湖) 錢塘西湖最為佳勝
- (南湖) 尚觀西湖全図無勝景其余名勝又何境
- (晴湖) 蘇州靈岩亦為名勝地
- (南湖) 先生来春帰郷里之時願賜西湖中奇石乎
- (晴湖) 西湖佳処在山水間若取一拳之石亦無足觀也
- (南湖) 然異国珍宝豈何論好拙乎
- (晴湖) 既蒙見委目当効命
- (南湖) 幸甚也
西湖略景如此乎
- (晴湖) 約略如此

費晴湖携来于自画数枚而示余則閱之皆米家筆法也

(南湖) 米家神韻筆致秀逸

(晴湖) 不過写意

画を描くに当たっての心の準備、筆勢に込められた含意、用筆の奥義、山水の景勝地等々、南湖が息急き切って矢継ぎ早に繰り出す質問に短い言葉で受け答える晴湖、といった場景が南湖にとって如何なるものであったかは、別れ際に贈答した両者の七言絶句のうち、南湖が晴湖に贈った詩、

留別費晴湖先生之作如在

君家遠作海涯遊 何幸小人得応酬

画談了来如宝玉 帰舟載得故園州

南湖拜手

に、端的に現れている。この「応酬」が自分にとってまるで「宝玉」にも等しいと語る南湖にとって、まさに長崎という「夢境」で敬仰する華人の文人と時を共にできた至福の時であったことが率直に吐露されている。なお日を措いて、礼状とともに一幅の書画を清河太平次に託したことがこの後に記されている¹⁴⁾。

『夢境応酬』には、晴湖との応酬に続く数丁に南湖が写生した挿図が収められている。

まず、画幅を掛軸ごと筆写した図(図4)がある。これには、

赤城、晴湖、定甫、生於唐館聴松楼余已写山水乞讀各加筆幅中已成一幅画図

と注記があり、晴湖をはじめ程赤城・黄定甫という清人文人の名がある。



図4 米法山水図

彼らとの交遊は、唐館の聴松楼で行われ、南湖があらかじめ描いて持参した山水に清人たちが著讀し山水に加筆するというかたちで文雅の交わりが繰り広げられた。この画自体は現存しない。しかし、南湖の長子南溟が天保十二年(一八四一)に模写した画幅が現存している¹⁵⁾。右の引用に「費晴湖携来于自画数枚而示余則閱之皆米家筆法也」と記されているように晴湖は米法山水を得意としたようで、米法山水図を持参したのは、晴湖に敬意を表するという気遣いがあったのかもしれない。

南湖自身が、唐館で目の当たりにした絵画や文房などの設えを写生した図(図5)が後に続く。標記に困ったのか、日本の床飾りを重ねあわせて「唐館床飾」と称している。

さらに、唐館内の露台を写生した図(図6)が続く。草木の盆のほか、「魚貫石」なるものを特筆している。金魚鉢に類するものであったことが、図中の記述でわかる。

二丁めくると、「館内小物売店」を写した図(図7)がある。壁には茶や煙草の貼札、棚には書籍や卷子、茶具などが並ぶ。店員が肘をついて読

む本には、「本ハ春秋」と、南湖の註記が添えられている。わざわざ註記を入れているのは、暇つぶしに読む本が経書ということに驚きが込められているようにも見える。また、画中には「好了」の訳解として「コイツハウマイト云俗云」と書き込まれている。文語としての漢文には通じている南湖にとっても、清人の話す口語は珍しいものであったのだろう。



図5 唐館床飾



図6 唐館露台図

さらにめくると、福州地方出身の長崎在住唐人が中心となって建立された黄檗宗の唐寺崇福寺で見た施粥用の大釜の図(図8)、同じく唐寺として知られる福濟寺から望む長崎湾の風景図があり、次の見開きには、「唐船之図」「阿蘭陀船図」を載せる。「阿蘭陀船図」の丁の裏には、長崎で見かけた中国の物品が珍しかったのであろう、筆、茶具、煙草入れ、下駄、

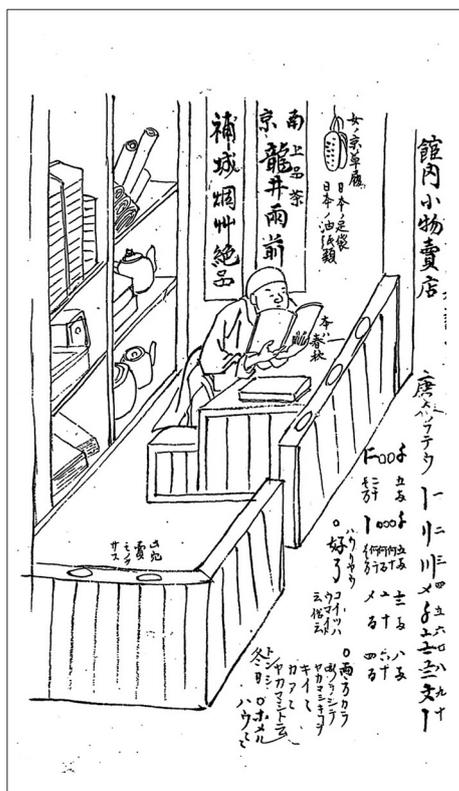


図7 館内小物売店



図8 福濟寺より長崎湾遠望

線香などの図を載せている。

南湖は、長崎遊学に当たって、清人文人との交遊を主として記した『夢境応酬』のほか、全旅程を『西遊日簿』に記録していることにはすでに触れた。同書をもとに、旅程を確認すると次のようになる。

九月七日 大坂兼葭堂邸に滞在していた春木南湖、長崎に向け船出。紀

行『西遊日簿』を著す。この間、岡山に文人画家浦上玉堂を訪ねる。ま

た、同じく長崎を目指した洋風画家司馬江漢と遭遇し、しばらく同道。

九月二八日 夕刻長崎に到着。

十月二日 唐通詞清川太兵衛（太平次）同道で唐人屋敷に赴き、張秋谷と筆談。費晴湖も同席。

十月五日 昼過ぎから、丸山の茶屋井筒で華人の酒宴に出席。

十月二日 費晴湖から山水画手本が届く。

十月二三日 唐人館に赴き、費晴湖の宿聴松楼に上り、程赤城に会い、ま

た黄定甫と筆談。さらに費晴湖と南湖が山水画を合作し、程赤城、黄定

甫が着賛した。南湖はまた、晴湖送別の詩を賦し、晴湖がそれに和す。

十月二六日 長崎出立。

十一月五日 夜、大坂に到着。

十一月二九日 夜、伊勢長島に帰着。

斎藤月岑『武江年表』巻の八、文政二年（一八一九）己卯（四月閏）の条は、「人モハヤル時アルモノト見エタ」る例として、南湖に言及している。

筠庭（喜多村筠庭）云フ、人モハヤル時アルモノト見エタリ、（柏

木）如亭ハ上方ヘ行カザル前ニハ名モ聞エタリ、其後ハナキガ如シ、

畫家ニハ如圭ナドモ然リ、再發シテアラハレシハ、大岡成寛、青木南
湖ナドアリ、去レド雲峯ハ勤仕ニヨリテ畫ヲ廢シタル間ニ、文晁ハ盛
リニシテ大家トナレリ、初ハ文晁、成寛、馬孟熙、伯仲ノ間ニイハレ
シモノガ、其中ニモ馬孟熙優レタリ、南湖ハ増山雪齋公ノ命ニテ、費
晴湖ニ畫ヲ學バシム、山水家ナルヲ後ニ狂ウテサマザマ書タル皆ワロ
シ。

南湖の長崎遊学は『武江年表』が特筆していることからわかるように、当時江戸の文人界では著名な出来事であった。さらに、この長崎遊学が雪齋の命であると、月岑に認識されていたことが重要である。大名ゆえに自由が束縛される雪齋の意志が強く働き、私的な興味があるにしても、家臣を公務の体裁を帯びて派遣したことは当時としてはありうるからである。類例としては、秋田藩主で洋風画家として知られる佐竹義敦（号曙山）が、洋風画の画技修得のために藩士小田野直武を、鉾物吟味役なる名目で江戸の平賀源内のもとに派遣した例がある。『西遊日簿』が全旅程にわたって委細を漏らさず記録しているのは、公務の復命を纏める必要ゆえであったと考えて間違いない。

この長崎遊学は、南湖に大きな転機をもたらした。月岑は、それを「再發」と言い表しているが、「南湖ハ増山雪齋公ノ命ニテ、費晴湖ニ畫ヲ學バシム」とあるように、長崎で清人費晴湖から直接手ほどきを受けたことを、「再發」すなわち転機とみたのである。江戸時代の画論書が南湖に言及する際、この一件を漏らすことはない。長崎に赴いて直接華人から画法の手ほどきを受けたという事実は、羨望とともに流布し、月岑のいうように一時的であるにせよ、南湖を中華に発する文人画殊に山水画の日本への伝達者の地位に押し上げたのである。『弘采録』が「山水の画は此侯と其臣南湖にと、めたり文晁等か及所にあらず」と述べ、田能村竹田は『屠赤

『瑣瑣録』で「近日江戸にて文晁、南湖杯畫に名家多し」と指摘しているが、いずれもこの「再發」を根拠にしていることはいうまでもない。

しかし、南湖の長崎遊学はただ家臣南湖の声望を上げるだけには留まらなかったことが重要である。中華文化に強い敬仰の念を持つ主君を一層深く沈潜させていく契機となったのである。南湖は、遊学するに当たって雪斎から、大きな期待とともに、雪斎の画と雪斎の所蔵する中国画を託された。長崎に來泊する清人に批評と鑑定を乞う、これが派遣の目的のひとつであったが、清人たちが雪斎画に与えた高い評価が、雪斎に画人としての自信を深めさせ、精神生活の抛り所へとより一層誘引することになったと想像されるからである。

『夢境応酬』で、長崎という夢境での応酬に控え、南湖に感銘と示唆を与えた費晴湖は、そもそも杭州の出身の商人で、唐船の船主として長崎に來航していた。船主としては、記録に残るだけでも天明六年（一七八六）から寛政八年（一七九六）までほぼ毎年長崎に來航していた。もとより専門画工ではなく余技で描いたにすぎないが、池大雅らに大きな影響を与えた伊孚九同様、それゆえに文人とみられ、拙に味わいを求める日本の文人たちには好ましい規範として受け入れられた。安西雲煙『近世名家書画談三編』（一八五二）では、「伊孚九ハ工拙ヲ以テ不可言、尤モ風致ヲ存シテ逸

ニ類シ、筆墨ノ閑雅ナル、獨自ラ樂ム者ニシテ、頗ル高蹈ノ風アリ。彼土ニ於テ名顯レズ、反テ此邦ニ知ラル、彼土人伊ヲ以テ如何ナル人トスルヤ。近來張秋谷、江大來或ハ費晴湖等、又伊ニ繼グ。」と、來舶清人南宗画人のなかでも、張秋谷や江大來とともに伊孚九に次ぐ評価が与えられている。

『西遊日簿』によると、長崎に到着した翌日、まずは挨拶を兼ねて唐通事・唐絵目利を訪ね、通事のひとり清川栄左衛門に、唐人屋敷訪問のこと、張秋谷という清人画人に持参の縮緬を渡すこと、雪斎の描いた画を清人に見せて鑑定を頼むこと、などを依頼している。縮緬の献上は入門のために

師に贈る礼物としての束脩の意味をもっていった。

南湖の長崎遊学は、当初、張秋谷への入門が目的のひとつであった。張秋谷は、当時墨竹画の名手として遠く江戸でも盛名があった。張秋谷の指導を受けることは南湖自身の希望であると同時に、その盛名を聞き及んでいた雪斎の意向が強く反映されていたとみられる¹⁷。

十月二日、唐通詞清河太平次を同道のうえ、唐館を訪ねた。『夢境応酬』の問答はこの時に行われたものである。面談は主に筆談によって行われたが、このとき南湖は、竹と蘭を描くための筆二本と竹の画を教材として、秋谷から直に初歩の階梯を示された。さらにその際、秋谷から雪斎に対して額二枚と竹の画一枚が贈られ、南湖には水筆十本が贈られた。

その傍らには三人の書画人がいたが、そのひとりが費晴湖であった。費晴湖についてはまったく予備知識を得ていなかったようだが、『夢境応酬』では、むしろ晴湖との応酬に紙数が多く割かれている。晴湖の与えた印象を『西遊日簿』は次のように記す。

姓費、名肇陽、字得天、別号晴湖、浙江湖州府居住、茗溪人也、画人。右逢候華人張秋谷ト晴湖ヘ筆ヲ持コトヲ聞ニ余画候通外ニ持ヨウナシ 遅筆モ早筆モアリ、然シイツタイモノヲカクコトテイネイナリ、各筆を懐中出シ書、秋谷顔色青、セイ高、ヤセテ病身ノ如ク静カナル人物、晴湖ハコエタクマシ、顔色黒赤シテ、セイ中、画法妙処アリ、印ハ漢之印ヲヨシトス。

秋谷は、墨竹を描く一方で、憚南田風の彩色花鳥画を描いており、現在ではむしろこの分野の画人として認知されている。しかし雪斎は、文人画の主要分野のひとつである墨竹の名手として認知していた張秋谷に関心がああり、南湖もその嗜好をよく理解していたに違いない。しかしいざ接触し

てみると、本来花鳥を得意とする張秋谷より、水墨の山水をよくする費晴湖のほうが主君の嗜好に近いことを南湖は察し、おそらくは雪斎の意向にも合致すると判断したのであろう。「画法妙処アリ」という一言が関心の対象の変化を端的に示している。後の南湖の行動を『西遊日簿』にみると、費晴湖に接近する姿勢をみせ、その成果として残されたのが、『夢境応酬』であった。

五日には、円山の茶屋で開かれた華人の酒宴に招かれ、席上、費晴湖とのあいだで画法について筆談で応酬を交わしている。

十四日には張秋谷から、墨竹画帖をつくったうえで雪斎に進呈したい旨、通知を受けた。また、批評を受けるために先だって遣わしておいた雪斎の書画を唐人たちが譲り受けたいと懇願している、との依頼があった。ことに費晴湖などは、「日本ノ風致ナシ」つまり和臭がないと感心頻りであったと、『西遊日簿』には特筆されている。これは復命されたであろうから、雪斎を非常に喜ばせたことであろう。さらに十九日には、費晴湖から画筆六本及び画囊が届いた。同時に先述の程赤城に依頼してあった雪斎所蔵中国書画の鑑定書も届いた。その後も費晴湖からは山水画手本が届くなどし、二十三日には、再び唐人屋敷に費晴湖を訪ね、費晴湖と山水図を合作し、帰国を目前にした晴湖のために、南湖が送別の詩を賦し、晴湖がそれに和したことが『夢境応酬』に書き留められている。華人たちとの交歓は、その名のとおり、夢境に遊ぶごとき体験であったのであろう。そればかりか、雪斎画に対する華人たちの好ましい反応は、多少のお世辞は別として、『西遊日簿』あるいは復命書によって雪斎に伝わるとともに、南湖が収集した中国書画や文房具は、雪斎のもとに届けられたに違いない。しかし、そうした物以上に「日本ノ風致ナシ」という評言が雪斎に与えた喜びがいかに大きかったかは想像に難くない。

〇おわりに

既述のように、雪斎の画を見た費晴湖は、「日本ノ風致ナシ」と評価した。湖上簑笠『書學捷徑』は、同じ意味を「和臭」と換言している。

凡そ唐畫をかゝんと思はゞつとめて和臭をさることを要とす。和臭あればいかほどよき畫にても取にたらず。

中華文化を理想とする江戸時代後期の文人たちが忌むべき悪癖について、華人が発した「日本ノ風致ナシ」つまり和臭を払拭したという評言を、文人中の文人を自認していたであろう雪斎は、最大級の賛辞として受け取ったはずである。後に長崎を訪れた田能村竹田が文政十年（一八一三）四月一六日付で郷里の友人高橋草坪に送った書簡には、「唐人」の画にも善悪巧拙はもとよりあるが必ず「一種の妙処」があり日本人には及びかねると書いているのを見ると、日本の風致すなわち和臭を脱して中華文化に近づくことは、中華文化を敬仰する文人たちに共通する最終到達点のひとつであったと推察される。精神生活と同時に日常生活まで中華風に純化しようとした文人増山雪斎の有りようを思い描くうえで、『弘采録』と『夢境応酬』は、格好の材料を提供してくれる。

【註】

- (1) 昔人以氣韻生動歸之軒冕巖穴、然二百年來、巖穴中名人代出、至軒冕寂然無聞矣、或言雪齋增山侯書畫、軼眇畦而直上、迺是其人
- (2) 山口泰弘「増山雪斎とその周辺について」『鹿島美術財団年報』五一 一九八七年『江戸の風流才子 増山雪斎展』図録 三重県立美術館 一九九三年
- (3) 佐々木金三「弘采録の世界―池田玄斎研究覚え書」酒田市立図書館

(4) 「都下名流品題」(一八一五)

(5) 雲室『雲室隨筆』(一八〇八)

雪齋曾君選増山河内守殿(伊勢長島侯)大名の一人にて風流抜群の人なり、書畫ともに直に華人によりて修せらるると申事なりしが當時世の中の振合、遠慮被致風流家出入も皆斷りにてありき、安部攝津守殿(武州岡部侯)、武田安藝殿(高家)、久世三四郎殿、井戸甚介殿、皆河内守殿交り厚き友にては有りし。

金井烏州『無声詩話』(一八五三)

雲齋長島老侯、號石頭翁、書畫並佳、風流自在、性慈仁謙挹、偶人之貧困、雖疎交必加霑接、山水人物、花卉翎毛、伎無所不詣、殊善爲生熟外、求生拙中有工見、専門作家不易及也。

(6) 享保一六年(一七三二)、中国浙江省から沈南蘋という画人が長崎を訪れた。南蘋の画は、鹿・猿・兔・鶴・鳳凰・孔雀などの走獸や鳥を花卉と取り合わせて濃厚華麗な色彩で描いた写実的な花鳥画が主で、その影響は、江戸時代後期、雪斎の時代になるとほぼ全国に拡がり、のちに南蘋派と称される一大画派を形成するようになった。雪斎は、今日、南蘋派を代表する画人のひとりに数えられる。

(7) 偽化石の一種。石灰岩質の細粒岩(泥岩や頁岩)が続成作用を受けたために、石灰岩質の団塊を生ずることがある。楕円体形の団塊の表面に亀の甲状の多角形の割れ目ができて、割れ目に沿って炭酸石灰が沈殿して方解石の細脈が生じたものを亀甲石という。日本では北海道夕張地方の中生代白亜系や、新潟県の新生代第三紀中新統の地層に多くみられる。(日本大百科全書)

(8) Margaret Jourdain and R. Soame Jenyns, *Chinese Export Art in The Eighteenth Century*, Spring Books, 1967

Oliver Impey, *Chinoiserie The Impact of Oriental Styles on Western Art and Decoration*, Oxford University Press, 1977

Graham Child, *World Mirrors 1650-1900*, Sotheby's Publications, 1990

Carl L Crossman, *The Decorative Arts of The China Trade*, Antique Collectors' Club, 1991

(9) 文化十二(一八一五)四月、南畝は雪齋還曆にあたり寿詩を贈っている。

(10) 亭に座を与えられて画を描いていた渡辺玄対は、江戸画壇を代表する画人谷文晁の師であり、南畝とは同年で、「今都下此人の右に出る者無之、畫家の一人といふ可也、山水に善く氣韻骨法實に當世の畫宗なり。」(『雲室隨筆』文政十年)といわれる、当代江戸きっての漢画家であった。若いころから雪齋とも親しい間柄であった。

(11) 琴ではない弦楽器を琴に見立てる例は三味線を琴に見立てた例がある。

(12) 端門外姫路侯邸中擬蘭亭作

世態喧々 三日神姿 緩々春游 随処飛觴 和楽韵友 淡味風流

巢丘隱人雪齋

右は長島侯増山河内守殿の事也

(13) 東京芸術大学附属図書館に自筆本が所蔵される。

(14) 奉清湖先生書簡如左

襄者接清容於井筒樓、飽聞高辭候然々、別後無恙乎、僕唯不堪相思也先所托之書画何遅々、発期己(己)迫焉雖促之隅館禁、不得至几下徒流思耳、先生如終業焉以一揮書画属清川氏使達畢甚也不画

奉

費晴湖先生桐下

南湖木鯤揮手

(15) 『江戸の風流才子 増山雪齋展』図録 三重県立美術館 一九九三年

(16) 鶴田武良「費漢源と費晴湖 来舶画人研究三」『国華』一〇三六号 一九八〇年

鶴田武良「費晴湖筆 山水図」『国華』一〇六六号 一九八三年

(17) 荒木千洲『續長崎畫人傳』には、「張秋谷 名幸、號露香、寫墨竹、天明中渡來。」と記される。そして南湖も墨蘭のほか墨竹を良くしたが、南湖の弟子金井烏洲は『無声詩話』で、「近日南湖翁、好作蘭竹、其法自清客張秋谷脱化來、而放筆縱橫、傍若無人、然其高風率不入時眼矣、噫。」と、秋谷に師事した成果であることを強調している。

(18) 馬場強「張秋谷と張秋穀」『長崎を訪れた中国人の絵画』長崎県立美術博物館 一九八一年